

日野川の戦い

新田軍の再起をかけ、守護斯波高経と戦う



脇屋義助の三峯城跡に建立されている城趾碑



鯖江の南、白鬼女の渡し跡付近から鯖江方面を見る



守護斯波高経居城の新善光寺城土塁跡(越前市正覚寺内)



越前における南北朝の最初の戦い「金ヶ崎城の戦い」は、越前守護斯波高経を中心とした幕府軍(北軍)の前に、新田軍(南軍)は敗北し、建武4年3月落城に追い込まれた。

しかし新田義貞は、戦闘が激化するなか、弟脇屋義助を伴い金ヶ崎を脱出し、南条山に逃れた。守護高経は、義貞も金ヶ崎で討死にしようと、その後は上洛し在京していた。

この機に義貞は、山から越前国内の諸勢力へ懸命の工作にあたり、三千余の兵力を得て軍事行動を再開した。この事態に高経は、若狭守護の弟家兼を伴い越前に下向し、府中(武生)に布陣し、新田軍に対した。

高経は府中の拠点新善光寺城の防備を強化するとともに、今後の戦いに備え、北ノ庄や九頭竜川周辺でも城(砦)の構築をいそいだ。この間、守護高経に従っていた平泉寺衆徒は、新田軍の反転攻勢を見て、兵力の半分を割き、新田軍に味方することを決め、鯖江の三峯城に籠もり脇屋義助を大将として迎え入れた。

斯波軍と新田軍の睨み合いが続くなか、建武5年2月、脇屋義助は三峯城を出て、鯖江宿へ偵察に向かった。これを見た守護高経の重臣細川出羽守は、五百余騎を率いて日野川左岸沿いを北上し、鯖江宿付近白鬼女の渡しで渡河し、脇屋軍を囲み激

戦となった。脇屋軍は窮地に陥ったものの反撃し、日野川右岸を南下し、高木・瓜生など在家二十余箇所に火を掛けて狼煙がわりとし味方に危機を知らせた。これを見た南軍の諸将は各砦から出て、日野川右岸に集結、義貞も山を出て合流し総勢三千余騎で布陣した。

一方、新田軍が日野川対岸に結集したことを知った守護高経は弟家兼とともに居城の新善光寺城を出て、左岸に戻った細川出羽守と合流し、これも三千余騎で日野川を挟んで新田軍に対峙した。

この時期の日野川は雪解け水で増水していたため、暫く両軍は対峙し

た後、新田軍の渡河で戦闘が開始された。戦いは一進一退であったが、新田軍の一部が後方から府中に進攻し火を放ったため、守護高経は居城の新善光寺城を奪われる事を恐れ、撤退を指示し、兵を退いた。

ところが、新善光寺城は防衛のために木戸や逆茂木が幾重にも設けられ、斯波軍帰城の妨げとなった。背後に新田軍が迫る中、高経は帰城を断念し、兵二千余騎とともに大虫に、若狭守護の家兼も千余騎の兵で若狭へ逃れた。その後、高経は織田を経て足羽方面へ退いた。

連敗続きの義貞には、一矢報いた戦いとなった。(文 奥山秀範)